040203

「節分」について調べてみました

「季節を分ける」という意味で、本来は立春・立夏・立秋・立冬の前日全てを指す。中でも春は新年の始まりでもあることから、室町時代以降、春の節分が重視されるようになった。

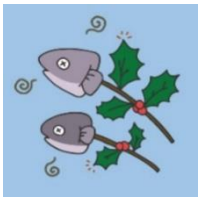
○「豆まき」

季節の変わり目には悪いものが家に入りやすく、それらを退治するために行われるようになった。古代中国で行われていた疫病を追い払うための儀式が元。「魔（ま）を滅（めっ）する」という語呂合わせで煎った「まめ」（豆）をまくようになった。落花生を使うことある。家の奥から玄関に向かって「鬼は外、福は内」と大きな声で唱え、勢いよく豆をまく。大きな声やまいた後にぴしゃりと音を立てて扉を閉めることで魔除けを行う。

豆は生ではなく炒った豆を使うのは、拾い損ねた豆から芽がでると「邪気が芽を出す」として縁起が悪いとされているため。

○「柊鰯（ひいらぎいわし）」

イワシの頭を焼いてヒイラギの枝で刺したもので、家の玄関などに飾る。これは、鬼が家に入ろうとした時、鰯を焼いた強烈な臭いで驚かせ、柊の棘で鬼を刺し追い払うというもので、鰯は食べたりもする。



○「恵方巻」

節分の日にその年の神様がいるとされている方角「恵方」（毎年変わる）を向いて食べる太巻き寿司。包丁で切らずに丸ごと一本を無言で食べきる。丸ごと食べるのは、「縁を切らないように」という意味、無言で食べるのは「喋ってしまうと福が逃げてしまうから」といわれている。入れる具材に決まりはないが、ウナギやかんぴょう、きゅうりや伊達巻などが一般的。

○「年齢の分だけ豆を食べる？」

豆まきをした後、自分の年齢の数もしくはプラス 1 粒だけ豆を食べるという風習があるが、これは、無病息災と歳の数と同じだけの福を体に取り込めるように、という思いが込められています。年齢を重ねるとなかなか歳の数の豆を食べ切るのは大変。そんな時は、数粒の豆を入れた温かい「福茶」を飲んだり、「豆ご飯」を炊くなどの方法もある。

豆まきで「厄除け」・「換気」・「（大声で）ストレス発散」の一石三鳥、してみませんか。校長